



第35期第2回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

令和3年12月22日（水）京都市総合教育センターで、第35期京都市社会教育委員会議の2回目となる会議が開催されました。今回は、「デジタル化とデジタル・デバインド（情報格差）の対応について」の議論が行われました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち14名） ※五十音順

石川 一郎 委員, 植松 明彦 委員, 岡田 智子 委員, 佐竹美都子 委員,
園部 晋吾 委員, 豊田まゆみ 委員, 永田 紅 委員, 廣岡 和晃 委員,
本郷 真紹 委員, 柁木 良子 委員, 森 清頭 委員, 森口 真希 委員,
山田 俊夫 委員, 山野真梨紗 委員

第35期第2回社会教育委員会議次第

開 会

1 議 事

デジタル化とデジタル・デバインド（情報格差）の対応について

- ① 「京都市及び生涯学習関連の取組み」（吉川課長） 資料1
- ② 「GIGA スクール構想について」（学校指導課 安村課長） 資料2
- ③ 協議

2 報 告

- (1) 京（みやこ）まナビィニュースレターについて 資料3
- (2) 京（みやこ）まナビィミーティングについて 資料4
- (3) 第63回全国社会教育研究大会石川大会について 資料5
- (4) 京都市生涯学習市民フォーラムについて 資料6

3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

■ 開会

■ 議事 デジタル化とデジタル・デバインド（情報格差）の対応について

○ 事務局（吉川生涯学習推進課長）

<京都市及び生涯学習関連の取組み>

生涯学習の分野におきましても全国的に「デジタル化とデジタル・デバインドの対応」が課題となっており、今回テーマとさせていただきます。

「デジタル・デバインド」とは？

インターネットやパソコン等の情報通信技術を利用できる者と利用できない者との間に生じる格差のこと。



デジタルには課題もありますが、今後、社会の様々な分野においてデジタル化は進んでいきます。デジタルが良いかアナログが良いかということではなく、デジタル化が進んでいく社会情勢を踏まえ、社会教育・生涯学習に関して、効果的な活用方法や、情報格差に関する留意点など、ご意見をいただければと思います。

まず、デジタル化ですが、コロナ禍の中、社会の様々な分野でデジタル化への課題が浮き彫りになってきました。行政の縦割りを打破し、社会・経済活動全般のデジタル・トランスフォーメーション（DX、情報通信技術の浸透が、人々の生活を、あらゆる面でより良い方向に変化させること）が急務となりました。

このため、国において基本方針が決定され、関連法案が成立し、デジタル庁が創設されました。国の基本方針が、～誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化～とされており、住民に身近な自治体の役割が重要になってきます。「自治体デジタル・トランスフォーメーション（DX）推進計画」では、令和4年度までに、全国の自治体で行政手続きのオンライン化を進める目標が掲げられています。

これを受け、京都市におきましても、行政手続きのオンライン化を進めています。

また、デジタル・デバイドの対応として、国（総務省）の補助金を活用した無料のスマホ講習会を、市内の2つの団体と連携して開催しています。各携帯会社においても、国の補助事業を活用して、携帯ショップでスマホ講習会が開催されています。

京都市の取組（デジタル・デバイド解消）

<スマホ講習会の開催>
(総務省「デジタル活用支援事業」)

スマホを使って、もっと暮らしを便利に！

多くのご質問にも答えながら楽しく学びましたり、インターネットで助け合いの情報を検索したり、自宅にいながらお医者さんの診察を受けられたり、確定申告なども手続きできたり…

講習会では、スマホを上手に活用するための基礎「デジタル活用支援事業」を実施しています。携帯ショップや地域の集会所などで、スマホ講習会を開催し、ぜひ、皆さまにご参加ください。

・特定非営利法人 京都市地域ITアドバイザー会（CITA(シーター)会）
・有限会社アシストワン

<地域コミュニティ活性化のためのデジタル化推進に関する連携協定>
(京都市 x SoftBank)

目的：地域団体のICTツールの導入・活用支援

対象：自治会・町内会等

内容：①スマホの基本操作
②LINEやZoomを使った地域活動の新たな体験

講師：ソフトバンク(株)のスマホアドバイザー

場所：行政施設や地域の集会所
(受講者側が確保)

また、京都市と SoftBank が「地域コミュニティ活性化のための協定」を締結し、自治会・町内会などの団体を対象に、無料のスマホ講座を開催しています。会場は各団体で確保していただき、SoftBank がアドバイザーを派遣する形となっています。

生涯学習の分野に関しても、コロナをきっかけに、動画配信や Zoom での会議が増えてきました。生涯学習部では、社会教育委員の講演会を「京（みやこ）まなびネット」で動画配信しておりますが、コロナで講演会が中止となり、動画配信のみということも多くなっています。京都アスニーなどでも、動画配信を行っており、動画によっては、会場定員よりも多くの皆様にご覧いただいています。こうした動画配信は、京都以外の方にもご覧いただけます。また逆に、京都の方が、全国の生涯学習センターなどの動画でも学ばれるなど、学びが広がっているのではないかと思います。

動画配信の課題としては、著作権等の問題や時間がやや長くなる場合があります。また、動画配信の場合、情報発信がしにくいということもあります。

ただし、動画配信は、コロナ対応だけでなく、仕事や育児・介護、お身体の事情等で会場にお越しになることができない方のためにも実施していますので、学びの機会や選択肢が増えるということは、良いことかと思っています。

その他、「京（みやこ）まなびネット」にホームページで学べるサイトを紹介する「おうちで生涯学習」というコーナーを新たに設けています。京都アスニーでは、講座の一部でインターネット予約も受け付けています。



デジタル・デバイスに関しては、スマホ講座を実施することと、もう一つ、分かりやすく紹介することが大切だと思います。「まなびすと」ではQRコードやインスタグラムの使い方も紹介しています。

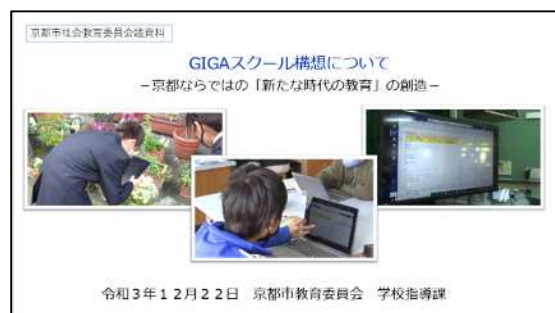
生涯学習について、現在のキーワードは、デジタルに関する部分としては、「ICT の活用で「つながる」「命を守る」生涯学習・社会教育」ということが言われています。コロナや甚大な自然災害など、ICT も活用しながら必要な知識を得て、他の人とつながることが、命を守ることにもつながります。

また、今期の社会教育委員会議のテーマを「多世代が交流・共生する生涯学習のまちづくり」としていますが、ICTによって、これまで交流の無かった世代とつながったり、子どもたちがおじいさん・おばあさんにスマホを教えたりと、世代間の交流にもつながるかと思います。

○ 事務局（安村学校指導課担当課長）

<GIGA スクール構想について>

全ての子どもに個別最適化された、グローバルで創造性を育む学びを実現するというGIGAスクール構想のもと、1人1台の端末により、4月からICTを積極的に活用した取組を全校で進めています。これは、これまでの教育実践の蓄積に、ICTを効果的に組み合わせることで授業改善を進め、情報活用能力を始めとした、学習の基盤となる資質能力の育成を進めることがねらいです。



環境整備についてですが、小・中・義務教育学校の普通学級にはWindows端末を整備し、育成学級には、個々の児童生徒の状況に応じた指導や支援が可能となるアプリを豊富に有するiPad端末を整備しました。また、高速大容量の通信が可能なネットワーク整備、大型テレビの全学級分の整備等も行いました。

また、ロイロノートスクールやMicrosoft365という授業支援ソフト、学力向上、事務効率化等の観点から、デジタルドリルや採点補助ソフトなどを導入し、一人一人の実態に応じた学びの実現に向け活用を進めています。

ここで、ソフトを活用した小学校での学びの風景をご紹介します。先生が子どもに課題を配信し、子どもが端末を活用して調べ学習を通して、自分の考えをまとめていきます。そし

て自分の意見を他者に伝えながら、カードを使ってまとめていきます。その後、先生に提出し、みんなで意見を共有し、それぞれの考え方を比較しながら、まとめていきます。活動に ICT の利点を組みあわせることで、より効果的で深い学びにつながります。



また、ある中学校では探究学習として、若手起業家の方にご協力いただき、関心のある社会課題に関するインタビューなどを実施しました。コロナ禍で様々な活動が制限される中で、端末の活用により、地域や時間を問わずさらに幅広い方との交流や、自分の興味関心に応じた体験活動を実施することができるようになりました。

このように、ICT を活用すること自体が目的化しないように留意しながら、時間や場所、空間にとらわれず、様々な場面での活用にチャレンジを続けています。

こうした取組を進めるため、今年度から、教育委員会として、学校支援体制を大幅に強化するとともに、教職員を対象とした、各種ソフトの活用研修や研修支援サイトのリニューアル、短時間の動画集の作成などを行っています。

また、個別支援の取組では、別室登校や特別な支援が必要な児童生徒に、授業のライブ配信や動画コンテンツの提供など、実態に合わせた学習保障が可能となりました。「誰一人取り残さない」学びを目指して、今後も各校の創意工夫のもと、取組を進めているところです。

登校支援については、不登校の児童生徒への ICT 支援の在り方をまとめたハンドブックを作成しました。オンラインで授業や終わりの会へ参加したことで、別室登校ができるようになった児童など、子どもたちの居場所づくりにつながる事例も生まれています。

今後の効果的な活用に向けて、保護者用のチラシや PTA しんぶん、本市の GIGA スクール構想の取組や家庭でのルール等を掲載いただき、家庭への周知をはかっています。

本市では、公教育が果たすべき使命として、かねてから「一人一人の子どもを徹底的に大切にすること」を理念として大切にしてきました。ICT を活用し、多様な学びの機会を確保することで、子どもたちの学習の可能性を広げ、子どもたちを大切にしていける、人権保障の可能性にもつなげながら、「誰一人取り残さない教育」の実現に向けて、引き続き取り組んでいきたいと思っております。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

デジタル化は、それぞれの世代、若年層、学生層、一般の市民の方々、それぞれの人にとって、便利な部分があればマイナスに作用するものもある。そういう点につきまして、日常、お気づきになっているところ、お感じになっているところを、ご指摘いただきたいと思います。

私は、学生と接しておりますと、今年の 2 年生はかわいそうな年代だと感じています。入学式もなく、課外活動も制約され、授業も全てオンラインというのが、約半年ありました。ようやくコロナ禍が沈静化して、対面授業が基本になりましたが、対人恐怖症というのでしょうか、とても弱く、登校拒否のようになるという状況が出てきております。その辺を十二

分に考え、今後、デジタル化のありようを構築していかないといけないと感じています。

○ 森 清顕 副議長（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



デジタル化ということで、生涯学習という視点から見れば、時間、場所、人数制限等を超えて、様々な人がいろいろなものを学べる機会があるということで有益なことではないかと思っていました。

この学校における GIGA スクールにおいても、生涯学習でも同じですが、一つは「体感を伴う感性の育成」という部分に関しては、このデジタル化は、相反するところにあるかもしれません。お話を伺いながら、コロナ禍により急激にデジタル化が進み、学校の先生たちは、思考やものの変化をどのように感じておられるのかなと思いました。また、インターネットで調べる学習は、正しい情報かどうかと判断をしていくことも難しいことかなと思っております。

グループで意見交換・交流があって、自分でプレゼンテーションしていくということですが、これは結局、パソコンのソフトの枠組みの中にはめていく感じのまとめ方になるのだろうと思いました。今までなら、自由に討議をしていろいろな形で表現ができていたのが、PCのソフトの枠組みの中に収め込んでいき、それをどうプレゼンしていくのかというプレゼン能力の磨き方になってくるのではないかと思いました。これまでは冒頭に語るだけで何か通じていたのが、プレゼンテーションしようとする、それが一向に伝わらないということになるかもしれません。特に学校現場において、子ども達の考え方や見方が、このデジタル化の中で見過ごされてしまうのではないかと危機感を感じています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

確かに、ネットの情報が主流化する中で、フェイクニュースの恐ろしさは取りざたされておりますので、どのように情報を整理し、伝えるかということは大きな課題です。もう一方で、オンラインをはじめとしてデジタル化が進む中で、これまでとは違ったマイナス面も出てきます。この社会教育委員会でも、ペーパーレス化の中で、デジタル教科書などが一般化して、さらには様々な文献もすべてオンラインで読むということで、図書館等も変わってくる、これはいかがなものかということで議論したことが、2年ほど前にありました。



○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長），山ばな平八茶屋主人）

今、説明をお聞きし、学校はものすごいことになっているのだなと感じました。現場の先生方も大変だろうと思います。端末を子ども達一人一人が持ってやるのはいいことです。子ども達は新しいシステムについて、先生以上に即座に学びとり、活用していくと思います。

デジタル化は理にかなった良い面も多くありますが、マイナス面も多くあると感じます。その中で学校で教えないといけないのは、ネットの危険性についてだと思います。例えば、ネットはいろいろなところとつながって、今までクローズだったところが全部オープンに

なります。それはいい情報もあれば悪い情報もあり、情報が有象無象にある中で、その荒波の中にいきなり子ども達が入っていくことになります。ボタン一つでお金が動くこと、知らない人とコミュニケーションをとることなど、様々な危険性が潜んでいるということについて、しっかり教育していかないといけないと思います。ですので、操作やソフトのことは、私はさほどそれを全面的にやっていく必要はないという気がします。

しかし、学校に来れない方などに対しては、とても有効だと感じています。学べる機会が本当に幅広くなりました。今までは登校しないとだめだったものが、登校しなくても大丈夫だということまでいけば、それが過保護かどうかというのは難しい問題になってきますが、とても機会が広がったなという気がします。



この端末の活用は、家庭での世代間のコミュニケーションという意味でも、とてもいいなと思いました。例えば、おじいちゃん、おばあちゃんが孫に端末の使い方を教えてもらう。実際、うちでも我々の母親や父親は孫に聞く。そうすることで孫とおじいちゃんおばあちゃんとのコミュニケーションが、それを通じてできるのかなという気はします。

一方で、今までと全然違ったことが起こってきています。今までは、上から下、年上の人から年下の人にもものを伝える、教えていくという流れだったのが、完全に逆行したということです。それが果たしていいのか悪いのかというのは、私は今の段階ではつかみ切れません。そういったことも含め、今までと全然違うことが起こり出したということに対して、それに対して備え、しっかりと考えていかないといけないという気がしました。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）

私たち女性会の会員は70歳以降の方が多いのですが、皆さんスマホを持ち、LINEで情報交換はしますが、そこまでの方がほとんどです。情報をネットで収集、発信となるとなかなか進めません。例えば、私は女性会の新聞を担当しているのですが、記事をデータで送ってくださいと言うと、Wordで文書は書けるが送り方がわからない方がいます。



ソフトバンクのスマホ教室はとてもいいのですが、なかなか行きづらと思います。女性会は学区単位で活動していますので、私達が講師を呼び、地域で皆さんを集めて学習ができそうで、とてもいいなと思いました。皆さんもスマホを使ったら便利だという意識はあるのですが、アプリやインストール、デバイス、リテラシーと、基礎的な言葉ですが、日本語ではないので、そこで止まってしまう人が多いかもしれません。来年度、私もスマホ講座の提供について構想を練っていたのですが、今のチラシでヒントを得ました。

また、GIGA スクールについてですが、6年生の孫は毎週水曜日に、タブレットを使う宿題が出るようです。この間もパワーポイントに声を入れる方法を知りたいと言っていました。子ども達は、話し合いをする時に、みんなの意見がすぐにタブレットで見

「情報リテラシー」
とは？
文字を読み書きする能力を意味するリテラシーLiteracyから派生し、「情報技術を使いこなす能力」と「情報を読み解き活用する能力」の二つの意味をもつ。



えるのでいいとメリットを言いますが、私個人の意見としては、主体はやはり紙という基本を変えるべきではないと考えています。

やはり、ネット記事というのは、記事の質よりも閲覧数が多いものが評価され、価値が決まりやすいと思います。しかし、本や新聞は校正をして、多くのプロの人が関わってできたものです。小学生・中学生段階でも、自分で調べて、付箋を貼る作業で、脳が活性化するのではないかと思います。だから、デジタルの学習と並行して今まで通り紙を媒体としたものの活用にも力を入れてほしいと思います。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）



新聞をペーパーからデジタルの世界にシフトし、今、その過渡期にあります。若い社員は割合抵抗がないようですが、私みたいに50歳を超えるとついていくのが大変です。ただ、私も、30年前に当時ワープロが出始めた時、私がブラインドタッチで打っているのを50代の先輩が見て「今の若者はすごいな。」と言われました。そして今、私が四苦八苦しているということは、今、デジタルを使いこなしている20代の人、おそらく30年ぐらい経ったら、同じように、若い人に「こんなこともできないのか」と思われるようなことになるのではないかと思います。そのような意味では、デジタルの格差というのは、永遠の課題なのかなという気がします。

先ほどご指摘もありましたが、知識や経験を、年配の者が若い人に教えるということが、このデジタルに関しては全く逆になっています。それは私の職場でもあります。デジタルに関しては、下克上が簡単に起きるのです。ですから、それがいいかどうか私もわかりませんが、そのような世界に入ってるという気がします。

普段、ニュースに接していて、デジタルの怖さはよく認識をしますが、東京の方で小学校6年生の子が、学校から配布された端末に悪口を書き込まれ、それを苦にして死に至った、というできごとがありました。あの件では、安易に書き込みできる、なりすましが簡単にできるという管理側の責任を問う声もありました。しかし、安直に書き込みをして人をおとしめるということ、抵抗なく行われているということが、非常に問題ではないかと思います。

先ほど豊田委員からご指摘もありましたが、今はネットで誰でも発信できます。活字の世界では、何人もの人がチェックをして、その考えが妥当なのか、人を傷つけていないかチェックが入ります。しかし、ネットの世界は、思ったことがそのまま文字になって流れていってしまうという恐ろしさがあります。ネットの危険性については、学校でもきちんと教えなければならぬのですが、このデジタルの世界というのは、学校教育の範疇を越えているところがあります。ですから、そこにどういった網をかけていくか、これはこれからの大きな問題であると思います。

もう一つ、デジタル格差というか、デジタルは際限のない世界ですので、できる人はどんどん詳しくなり、ついていけない人はずっと取り残されたままというように、デジタルの能力、リテラシーによって、その人の将来が大きく変わっていくという部分があると思います。ネット環境において、便利な環境で育った人とそうでない人の間には格差が生じています。

それが、おそらく家庭の中で、再生産、再拡大していくという部分もあると思います。これをどう考えていくのか、これは社会的な課題なのではないかなと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

来年から高等学校も新指導要領になり、「情報」科目の内容もガラッと変わります。一番ベースの「情報」科目について、どういう形がよいのか、大学の立場で議論するのですが、なかなか難しく、同じ「情報」という科目名ですが、以前とは全然違う「情報」になっております。そういうことで、5年後には、我々は全然ついていけないような内容になってる可能性が非常に高いです。

○ 山田 俊夫（京都市小学校長会幹事・京都市立小栗栖小学校長）

GIGA スクール構想の現状について、学校が今、どのように考えて取り組んでいるのか、話をさせていただきます。

GIGA スクール構想については、ここ2年間でハード面とソフト面について整備をしていただきました。一方で、教職員のスキルが残念ながら追いついていないのが現状です。もちろん堪能な教員もおります。

この端末が導入される前、学校にはコンピュータールームにパソコンが20台ありました。しかし、活用については、2人に1台というような使い方でしたので、子どもが1人1台使って学習を進めることが難しかったです。それに伴って、情報モラルの教育、情報リテラシー、情報をうのみにしないでよく考えていく必要があると指導しながら、コンピューター教育について、取り組んできました。

今回、GIGA スクール構想で、1人1台端末が入り、嬉しい気持ちとどう扱っていったらいいのだろうという戸惑いもありました。

この9月に、新型コロナウイルス感染症関係で、学級閉鎖がありました。その時には、各家庭に端末を届けて、使い方を保護者にも説明し、健康観察や学びのコンテンツで授業をする、課題を出すなど、子どもと家庭、学校とのつながりが切れないように取り組みを進めました。

教員には、このGIGA 端末は一つの文房具だという話をしています。道具としてどう使うのか、というのを子ども達に学ばせていかないといけません。道具ですので、GIGA 端末を学びに使うのか、遊びに使うのか。極端な話をすると、犯罪に使うのか。使い方を間違えないような子どもを育てていかないといけません、という話をしています。

それから、先ほど「体感を伴う感性の育成」という話も出ておりましたが、乳幼児期、児童期の子ども達は、直接体験をして感覚を身に付けるということが非常に大事な時期であると思います。例えば、文字の獲得についても、目で見て、手を動かして、頭を働かせて、文字や単語の表す意味、いろいろな背景を感じ取って、概念を獲得していくことは大事です。ですので、デジタルがすべて取って代わってしまうわけではありません。デジタルドリルの導入もありますが、紙のドリルの良さ、デジタルドリルの良さ、それらを天びんに掛けながら、それぞれの教科、学習、場面で、紙かデジタルかを取捨選択して、取り入れることが大



事ではないかと思えます。

また、GIGA 端末の活用で学びが変わった場面としては、例えば体育の跳び箱やマット運動で、子ども達が2人1組になって、跳び箱を跳ぶのを録画します。その後、録画を再生して、「ここがあかんかったんだなあ」、「こうしたらもっと上手になるね」と体育の授業中に振り返り、修正することが、リアルタイムでできるようになりました。

その他には、音読の宿題を GIGA 端末に録画をして、担任に提出します。担任は、実際に宿題で読んだ音読をチェックします。昔は、音読チェックカードに保護者がサインしてチェックしていましたが、実際に子どもが読んでいる画面を見て宿題のチェックができます。子どもも自分が読んだ映像を見直し、「こうしたらよかった」と振り返って、改善に結びつけられます。このようなところは、学び方が変わり、効果的な学習になってくるなと感じているところです。

また、本校には日本語教室があり、2学期にサウジアラビアに帰っている子がいます。3学期にまた戻ってくるのですが、2週間に1回、Zoom でつなぎ、学級の子どもとサウジアラビアにいる子どもが交流をして、日本語を忘れないようにしています。日本とサウジアラビアが教室を超えてつながることは、今までの学校教育の中では考えられなかったことです。

教員には、「全てに GIGA 端末を活用、デジタル化するのではなく、あくまでも子ども達の学力向上に結びつけるために、何が一番いい方法なのか、そこを見誤らないように考えてくださいね。でも使えそうだと思ったらどんどん使ってくださいね」という形で進めているところです。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

従来の制約を超えた、学びの広がりという点では有益性が大きいと思えます。一方で、「感性の育成」という点では、心配です。我々は実際に、舞台や音楽会に行って直接見たり聞いたことがあるから、たまに画面で見るのもよいですが、画面でしか知らない子ども達が育つてくるとどういうことになるかというのは、やはり一抹の不安があります。その辺りをどう整理していくのかというのは、今後、教育の場面でも大事になってくるのではないかと思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役，アテネオリンピックセーリング競技日本代表）



山田先生のお話を聞き、大きな変化があるデジタル化なので、私も不安に思うことが多くありましたが、活用をされていてすごいなと思いました。

このデジタル化は世界を広げるためにも必要なツールですし、使い方を学ぶことや知ること、発信することという意味では、必要なことだと思っています。

インターネットは教科書でもないですし、広いようで、ある意味狭い気もします。答えの探し方が、デジタルを通じてだけになってしまうということが怖く感じます。

今の子ども達は、体感することを経験することよりも、知識から入る経験が大きくなっていくのだと感じています。そうは言っても、デジタル化が当たり前になっていく社会の中で、何か新しいリアルな絆が、これから作られていくのではないかという気もしています。その新しい価値観や、今までにはない絆のあり方について、こうあって欲しいという答えがある程度あった上で、教育を進めていけると、今は手探りの状態なのかとは思いますが、デジタル化の中でのコミュニケーションの形や関係、こういう答えというのが、どこかでいいものであればいいなと感じています。

○ 植松 明彦 委員（令和2年度京都市PTA連絡協議会会長）

先生方からお話を伺っての感想を簡単に2点と、提案を1つさせていただきます。

まず1点目、私には高校生の娘が2人おり、帰宅後、何してるのかなと思って見ていると、YouTubeのお笑いのコンテンツなどを見ていました。時間が経つと、カリスマの先生の数学や物理の授業の動画と教科書を見ながら勉強していました。こういう時代になったのだなと思いました。今までは大手の予備校などがお金を取り、衛生で配信してサテライトの教室で学んでいたのが、家で無料のYouTubeを見ながらできる。教えているのを少し見たのですが、結構上手に教えていました。全てが置き換わるわけではありませんが、無料のコンテンツがYouTubeで充実してくる、そういう世の中になって、それでもなお学校に通ってまで学ぶことは何かというのを考えさせられる一面がありました。



もう一つが、「体感を伴う感性の育成」という重要なキーワードがありましたが、私は農業をしており、ある市立幼稚園に大根の育て方を教えに行くのですが、こういうご時世ですので、なかなか幼稚園に行くことができません。そこでZoomで繋いで、種まきと収穫はリアルで行い、その間の収穫のポイントポイントは、私の畑と幼稚園の畑をZoomでつなぎ、「この虫は青虫だね」、「このステージになったら、大根の間引きしようね」と、画面越しで行いました。ネットでつながりながら、ハイブリッドというのでしょうか、このようなやり方もあるのだなと私自身も勉強させてもらいました。まさしく道具としてのITの可能性を感じる事ができました。

最後に1点、デジタル・デバイドの解消というテーマがありました。学校の情報化について、児童・生徒用のネット環境の整備は非常に進んだかと思いますが、他方で、学校というのは地域住民にとって一番身近な生涯学習の拠点でもあると私は理解しています。例えば、社会教育団体や、自治会の方々など、地域住民が、学校のふれあいサロンで学ぶという場面があるかと思います。そういったときに、ネット環境が今まで以上に整備されていると、Zoomでの会議や、LINE、あるいは生涯学習部で作られたコンテンツをみんなで見ながら勉強するなど、そういった可能性も広がっていくと思います。デジタル・デバイド解消のため、生涯学習の観点からハード面でも、何かしていただけると、現場としてはありがたいと思いました。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

会社でもコロナの関係で、新入社員に社員研修をウェブで行っておりますが、半年、1年遅れになります。集合して勉強することは続けております。集合して学びながら、いろいろな意見を言うことは大事です。企業側はそういうことを求めて今やっていると思います。



デバイドの対応について、学校の中は問題ないのですが、家にネット環境がない方もおられます。もちろん学校では、ネット環境が整ったものを家に持って帰られていると思います。そういうところで格差が出ないように、一人一人がパソコンを持っているわけですが、その中で家に帰っても学習ができるということについては、ぜひ続けていただきたいと思います。きっとこのデジタル化はすたれません。これからますますデジタル化が進んでいきますので、その先を見据えても、そのことを更新していくということについて、お願いしたいです。

また、会社ではIT化でデジタル人材が不足しています。そのような中、研修は、ある事業所で10人、違う事業所で100人集めて、教えられる方がそこで教え、デジタルを活用しながら大きな集団で授業をするというやり方をします。例えば、学校の先生が、デジタルを教えるところに多少差があるなら、クラスや学年ごとではなく、場合によっては、全クラスを集めるという方法があります。また、代表者を集めて、詳しい方が教え、代表者が学び、今度はクラスに戻していくというやり方もあるのではないかと思います。できるだけ早く人材を育てていくということも、重要ではないかと思っています。

もう一つが、大学生について、私も大学で講義をしていますが、ほとんどの学生がパソコンを持っていません。今の方はスマホです。なぜかという、高く買えないのです。そういった意味では、小学校での15分位の学習からスマホではなく端末を使って、しっかり文章が作れる学習を続けて欲しいと思います。そのことは、会社で働くのであれば、必須になります。

最後にもう一回戻りますが、協議して議論すること、これは必ず必要です。個別に端末に打ち込んで勉強することは構いませんが、個々でパソコンやスマホの中だけで終わってしまうのではなく、その結果を、仲間や生徒と共に議論し、成果を出してほしいと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

非常に大きな問題だと思います。最近では学生達も十分に議論したと言っても、実際にはLINEで打ちあがっているだけということがあります。それで議論したことになるのか。そこにある制約というものについて、実感してもらいたいと思う次第です。

○ 柁木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

GIGAスクールの映像を見て、あれだけ早く使える人たちがあと数年して大学に来ることを想像すると、私も遅れないように一緒に学んでいかないといけないなと思いました。

他の委員さんがおっしゃったように、1・2回生に関してはおとなしい気がします。やはり対面授業が少なかったこと、人との距離を取りましょう、黙食しましょう、なるべく話さないようにしましょう、ということが定着してきているのは、コロナ禍ではいいのですが、

コミュニケーション力が非常に乏しくなっている気がします。

子ども達はパソコンを使うなど、ツールとして操作することはすぐに覚えると思いますが、やはり大事なことは自分で考えることと、言葉にして人に伝えることではないかと思います。私のクラスでは、グループワークをして発表するという時間を設けています。みなさん、ノートやレポートを作成する、文章を文字に打ち込むのは得意です。しかし、言葉にして、人に伝えるというところは、もともと日本人はシャイで控え目なところと、今コロナ禍で対面授業が少ない、人と喋ることが少ないということがあり、できていないように感じています。ですので、私は、なるべくグループワークで人の意見を聞きながら、押したり引いたりして、最終的に発表し、プレゼン力をつけてもらおうと考えています。



また、情報はスマホで調べますが、あくまでもそれは場所などを調べるもの。なるべく実際に取材に行く、体験する、感じることを大切に、取材先の人から話を聞いて、発表するようにしようと言っています。ツールを使いこなすことは皆上手ですが、やはり感性です。頭で考えて、感じて、そして言葉に出して表現する、ということをお願いしています。あくまでもスマホはツールの一つとして使いこなしながら、情報の何を使うかという選択、情報をうのみにしないように、自分の目で見て考えて、判断出来るような教育が必要だと思っています。

○ 稲田教育長

小中学校の学習指導要領には、探究的な学びというのがあります。昔のように黒板に書いてあるものを一生懸命写すというより、子ども達は議論する学びをしているので、大学に行った途端に大講義室で一方的に講義を受けることに、ギャップを感じる子どもが増えているようです。やはり大学も探究的な学びを今後取り入れないといけないと思います。学生はギャップを感じて、初めは「大学が面白くない」と言い、2、3年生でゼミになると面白くなるようです。そういう声があるということも知っていただきたいです。



○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

大学生にとっては1，2年の時のいわゆるリベラルアーツをどういう形で展開するのが大きな課題です。大講義は大講義でそれなりに意味があるのですが、日常、小中高校で課題探究型学習を基軸にしてきた子は、少し戸惑うところがあるかと思います。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所ステンドグラスプロジェクト推進室室長）

私自身は子どもが中学生と小学生で、コロナ禍でタブレット端末を持って帰って学習をしている様子を目の当たりにしています。企業で在宅勤務やオンラインツールの活用も進んでいますが、やはり気を付けないといけないと感じることは、デジタルというのはツールであり、目的ではないということです。私たち社会人も子ども達も、なぜ学ぶのが、そして、

なぜツールとしてデジタルを使うのかというところを考える時間や機会を設けることはとても大事ではないかと思います。



リベラルアーツや倫理観などを学んで社会人になり、そして社会人になってからも、また豊かに生きるために私たちは学び続けるものではないでしょうか。今までは、物事を覚える、新しいことをインプットすることが教育の主なコンテンツでしたが、情報化社会では簡単にその答えが手に入るようになっていきます。このような時代においては、何のために、という目的意識を醸成することに多くの時間が割けるのではないかと。これは情報化社会の大きなメリットだと言えますので私たち大人から、そのような姿勢を子ども達に見せ、教えていければ良いですね。

またデジタルは、若いの方が圧倒的に得意です。台湾のオードリー・タンさんがリバーズメンターで、政治にも関わっておられたように、私たちの会社でもリバーズメンター制度を取り入れて、若手から教えてもらうことを行っています。世の中の社会の流れは、経験した人からは倫理観や歴史観などは伝えられますが、新しいツールのことや、若者が何を今欲しているのかという社会の価値観の変化は、ぜひ若者に学びたいと思っています。

ダイバーシティの観点から言うと、先ほどの特別支援はとてもいいなと思いました。学ぶ機会や選択肢を広げることに繋がりますので、ぜひ積極的に活用いただき、何かのきっかけで、社会との接点を広げて豊かに生きていく人たちが増えると、より良くなっていくと感じております。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

確かに先ほどから出てきていますが、世代間交流を促進する一つの手だてとして、このデジタルというものが、若年層から上の方へ、その代わりに格上の方からはいろいろな経験ならではのこをこ教授いただくという交流のあり方は、望ましいと思います。

○ 永田 紅 委員（歌人，京都大学特任助教）

デジタルかアナログかどちらがいいかということではなく、デジタル化はいやおうなく迫っているなということを実感しています。私の娘は小2なのですが、去年コロナで、小学校に入った途端に休校となりオンライン授業が始まりました。ですので、タブレットはスイスイ扱っています。学校とは別に教育教材をとっているのですが、提出できていない課題の紙媒体が溜まっていくのを見るのが私のストレスでした。最近、タブレットの学習がやりたいと娘が自分で見つけてきて、切り替えたところなのですが、食いつきはいいです。専用のペンでタブレットの上に手書きはできるのですが、紙の上を書くのとは違うので、どうなのかなと思いつつながら見ているのですが。ただ、10年後の試験は紙の試験ではなくなっているだろうし、いやおうなく変わっていくのですね。



今日も私は大学で大学院講義の教室に行ったら、学生が早く来ていて、パソコンでノートをとるために充電しないといけないから早めに来て席を確保したと言っており、手書きが

減ってきていることは実感しています。

今回の情報格差を考える時に、まずタブレット、パソコンを買えるかどうかという、経済的、物理的な格差があります。そしてもう一つ、それを教えてくれる人がいるかという環境的な格差があります。

学校の場合は、1人1台支給され、教えてくれる人がいるから、比較的大丈夫なのかなと思います。むしろ社会における格差が大変だと感じます。今回、新型コロナワクチン接種の予約をとるにも、インターネットを上手く使えない人は、何時間も電話をかけてやっととれたりと苦労されましたし、デジタル化にどれだけ馴染んでいるかによってこのしんどさが随分違ってくると思います。ホームレスの方がスマホをもつことにも壁があるかもしれませんし、その辺、社会がこれからどうなっていくのか。

私自身は、今大学で周りに教えてくれる人がいるので、苦手ながらも教えてもらいながらなんとかやっていけていますが、いざ家で一人になったら、「誰に聞こう、どうしたらいいのだろう」と怖い。「教えてくれる人がいるかどうか」というのが、一番心配に思っているところです。

危険性として、セキュリティの問題ですが、特に子どもは無防備にいろいろなサイトを見ちゃうので、子どもが見るサイトとして適切なのかはいつも気になります。また、自分が見たものに関するニュースや広告が自動的に多く表示されてしまうので、それが標準だと思ってしまう怖さがあります。大人でも何か商品を調べた時にそれに関連する広告がどんどん勝手に出てきますが、あの不自然さを私はまだ感じられているけれど、子どもはそれを普通とってしまうかもしれない。その危うさも知らせたいと思っています。

災害時も含めてですが、スマホが使えなくなった、充電できない状態になった、ネットに接続できない状態になった時に、あの「何もできなさ感」をどうするか。スマホに頼り切っている状況がどうなっていくのかと脆弱性についての不安があります。

また、ペーパーレスについて、ちょっと話が飛びますが、この間、正倉院展を見に行きました。千何百年前の古い文書が残っていて、「ああこうやって書いてたんだな」と筆で書いていた人のことを想像しながら、書かれた内容、紙が実際に残っていることについて、いろいろ感じてきました。これからのデジタルの情報は、千年後など長いスパンで考えた時に、どうなっていくのだろうかなど思いを馳せました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

確かにデジタルでいろいろなことが変わってきて、私も文字と格闘するような仕事をしておりますので、最近、追い立てられる感があります。余談ですが、かつて大学といえば始業時間になると、教員はのんびりと腰を上げて、講義に行こうかという感じでしたが、最近はずっと授業が始まる前に機械をチェック、セットして、オンラインで作業しないとイケなくなり、本当に世知辛いなど実感しています。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）

情報格差ということで、特に障害者につきましては、これは命と直結しており、東北大震災では、障害者の死亡率が健常者の方の約2倍以上という数字が出ております。情報が不足

したために津波で命を亡くされた方も多くいらっしゃいました。そのようなことがあり、障害者団体では、どうやって情報を早く入手するかということ、各々の団体で話し合いの場を持たれている状況が続いています。

総務省のデジタル化構想の中で、誰も取り残さないということ、打ち出されているのですが、調査によると、やはりリテラシーや利活用が不十分だということがあげられています。

平成28年度の厚労省の調査によると、「生活のしづらさ」という調査項目の中で、身体障害者の方の情報入手手段が、一番がテレビとなっております。そして次が、家族、友人、介助者と人為的なのですね。デジタル情報は上にあがっていないのです。



私も今、地域で、障害者の方と防災時にどうやって情報を入手するかということ、話し合う場があるのですが、その中でやはり「身近な人からの情報に一番頼りたい」という方が多かったです。

SNSの普及で官公庁もツイッターなどで情報発信されていますし、公共交通機関も今はスマホで、すぐ情報が入手できるのですが、やはり「最終的な判断は、人から得たい」という状況でありますので、おそらく今後もそういったことが必要とされるのではないかと思っております。

それから、機器の進化により、スマホではボタン操作もなくなっており、変化についていくのが大変です。デジタルの言葉もあふれ、情報を入手する時に「検索ワードをどうやって入れていかわからない」という方もおられます。先ほど、永田委員もおっしゃいましたが、自分の嗜好に合う情報はどんどん入るのですが、関心のない情報は、全くおざなりになってしまうということも問題視されているようです。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

障害者の方などに、情報を正しく迅速に伝えていく、その辺りのところが今後、デジタルに関連するところで、一番力をいれて話ができる場所だと思います。まず、周りの健常者の方々の積極的な支援も必要になってくると思いますので、合わせて取り組んでいきたいと思えます。

○ 山野 真梨紗 委員（市民公募委員）

一大学生の意見として、若者は基本的にデジタル・デバインドに陥っていないと思います。ただ、デジタル・デバインドに陥っていないからといって、地域の情報や京都市が行う生涯学習の機会などの情報には、疎いなと思っています。



先ほど岡田委員がおっしゃっていたように、SNS やインターネットの情報は、興味のあるものは、深く掘り下げていくことができると思うのですが、一方で、興味がない情報は淘汰され、知らないまま終わってしまうのが、SNS やインターネットの危険性かと思えます。

そういう意味で生涯学習の機会を SNS で発信することは、非常に重要ですが、SNS の

限界もあり、地域の活動に興味のある学生は SNS の情報を入手して、参加することができると思うのですが、興味のない学生は SNS の情報を入手できない、しないので参加できない。そういう生涯学習の機会の差、問題があると思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

学生の立場から切実な問題として提起いただいたと思います。まずは、双方の意識の喚起のありようを、今後どういう形で進めたらいいかを考えていく必要があると感じました。

以上で委員の皆さん方から、貴重な意見をいただきました。いずれにしましても、一つの案で、片付けられるような問題ではなく、また、新しい展開があると思うのですが、その都度、我々として何ができるかを考えていかざるをえないと実感しました。

■ 報告一1 京（みやこ）まなびいニュースレターについて

○ 事務局から

市民の皆様の学びのきっかけとして、京都市の生涯学習情報をお届けする「京（みやこ）まなびニュースレター」。今回は「おうちで学ぼう！」をテーマに、オンラインで学べる京都市の生涯学習関係施設のホームページやSNSを紹介しています。

また、京都市社会教育委員のコラム「まなびのつぼ」は、廣岡委員に「労働組合役員として、今、学び直しのすすめ」と題して、ご執筆いただきました。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

私の経験や思いをそのまま書かせていただきました。またよかったら参考にさせていただければと思います。ありがとうございました。

■ 報告一2 京（みやこ）まなびミーティングについて

○ 事務局から

京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う、京（みやこ）まなびミーティングについてです。第 31 回、32 回、33 回目はアスニー特別講演及び醍醐味講座で、本郷議長、石川委員、森副議長にご講演いただきました。コロナ禍ではありましたが、どの会も満席となり、参加した市民の皆様からは、「大変わかりやすかった」、「ぜひ次回も聞きたい」というご意見をいただきました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

私は、ちょうど来年が聖徳太子が亡くなって 1400 年で、合わせて伝教大師最澄が亡くなって 1200 年ということで、『聖徳太子から最澄へ』という、非常に長いスパンでの話をさせていただきました。最後は、早足になってしまったため、早速、受講者の方から続きを聞きたいとの声もあり、次を考えている次第です。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）

新聞社で社説を書いておりますが、このコロナ、オリンピック、選挙、その他いろいろ試行錯誤しながらの日々でした。そういう自らのプロセスを振り返る機会が持てて、私自身も良かったと思います。

○ 森 清顕 副議長（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

今回はお寺の防災の話をとということで、「文化財をどうやって守っていくのか」というお話をしました。電力や通信が遮断され、何も無い時にいかに生き延びるのか。またそのような中でも、文化財やお寺を守る時にどのような考え方があるのかをお話させていただきました。

これまでに実施したミーティングのレポートはこちらから↓

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/category/180-8-2-0-0-0-0-0-0-0.html>



■ 報告一3 第63回全国社会教育研究大会石川大会について

○ 事務局から

今回の大会は、初めてのハイブリット開催で、石川県の方は会場で、その他の都道府県の方はオンラインで参加という形になりました。会場からの質問のほか、オンライン参加の人はチャットで質問を織り交ぜながら、スムーズで活発な議論がされました。新しい会議の形が定着してきた様子でした。

■ 報告一4 京都市生涯学習市民フォーラムについて

○ 事務局から

11月に毎年行っております生涯学習市民フォーラムを、今年は京都アスニーで開催いたしました。榎木委員、ご出席いただきありがとうございました。

今年も感染拡大防止のため、例年実施しております生涯学習を推進いただいております方の表彰式典を取り止め、市長や松本会長のご挨拶もビデオメッセージとさせていただきました。

講演会は、前の京都市副市長、現在、京都文化交流コンベンションビューロー専務理事の村上圭子さんに、『コロナ時代の不易流行』をテーマにご講演をいただきました。

★当日の様子は、「京（みやこ）まなびネット」で動画配信中だよ。↓

<http://miyakomanabi.jp/news/?act=detail&id=449>



■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

○事務局から

「I COM京都大会レガシー継承事業のnendo×京都の匠展」リーフレットをご覧ください。I COMというのは国際博物館会議のことで、2019年、日本で初めて京都で開催されました。この大会の理念をレガシーとして引継ぎ、京都の博物館、文化芸術振興の機運を一層盛り上げるために、京都の匠と、国内外に幅広く活躍されてるデザイナー、佐藤オオ

キさんがコラボレーションして、伝統的な美術、工芸分野において、これまでにない斬新な作品を展示した展覧会を開催します。会場は、二条城と清水寺で森委員にはお世話になっております。ありがとうございます。

期間中には、京都の博物館を巡る「ミュージアムロード」も開催いたします。

○ 植松 明彦 委員（令和2年度京都市PTA連絡協議会会長）

<PTA しんぶん No.99>

「PTA フェスティバル」を、毎年京都の国際会館などで行っていましたが、コロナということもあり、昨年は収録形式、そして今年はハイブリッド形式（YouTube でライブ配信）で行いました。今回は、性教育について、渡邊安衣子先生をお招きして、保護者と座談会形式で行いました。画面を見ながら、YouTube にコメントを書き込んで、先生方に質問し、それに対してリアクションする、あるいは保護者同士、先生と保護者同士で話し合うなど、新しい形式で行いました。

ありがたいことに、見逃し配信も含め、今日段階で約 3500 回見ていただいております。その他、京都市の全ての PTA から提出いただいた写真展や、各機関から同意していただいた動画も含めて、サイトに掲載しておりますので、関心のある方は見ていただければありがたいです。



■ 閉会

■ 閉会挨拶（稲田教育長）

皆様には、年末の大変お忙しい中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。

コロナ対策という面でも、一気に広がりました ICT 化ですが、先ほどご覧いただきましたように、非常に子ども達の学びの可能性が広がっています。

山田先生から発表がありましたが、日常の学び方もそうですし、不登校の子ども達、あるいは障害のある子ども達の学び方も変わりました。また、重度の医療的ケアが必要な子ども達も、目線でタブレット操作し、活用をしているということに、これは人権保障という点で大きな展開だと思いました。



また、危険性については、学校で使う端末には制限がかかっておりますが、スマホ等家庭で使っているものについては、いろいろなところにつながっていきますので、情報を見て、しっかり教えていかなければならないと思います。

また、タブレット、ICTだけではなく、学校でのリアルな体験、自然体験学習や、実際に演奏会を聴く、演劇を見せるなど、リアルな体験はしっかり並行して行っていかなければなりません。

学校教育というのは人間関係を学ぶ、あるいは人間である教師が人間である子どもに教える場ですので、そういうことを大事にしていきたいと思います。去年の3ヶ月の全校一斉休校の後に、中学生が朝日新聞に「勉強しようと思ったら YouTube で学べる。学校に行く意味って何だろう、ということ考えたときに、やはり、ぶつかり合いながらも、そうしたことも含めた苦みを経験するのが、学校でないか」と投稿していました。本当に、それは大切なことだと思います。

それから、情報格差については、植松委員から提案がありましたが、学校での学びというのをどういう形で実現できるか、今後、検討していきたいと思います。

「リテラシー」は、もともと「識字」と英語で書くそうです。昭和10年にできた落語に「代書屋」というのがあり、これは字が書けない人が履歴書を代書屋の司法書士に書いてもらおうという落語です。当時は、まだ字を読めない人がたくさんいました。今は読める人ばかりですが、新しい「リテラシー」が、この「ICT」になるのではないかと思います。

時が移ることによって解消されていくのかもしれませんが、やはりそれができない子をどう支援していくかは、これから大事だと思います。

皆様のご意見を踏まえて、今後とも、生涯学習・学校教育を進めていきたいと思っております。ありがとうございました。

